

六臂の如意輪観音菩薩坐像における造像技法の研究

—奈良・元興寺 木造如意輪観音菩薩坐像の模刻制作を通して—

文化財保存学専攻 保存修復(彫刻) 石井 麻依

如意輪観音菩薩坐像 ヒノキ材 寄木造 素木仕上げ 玉眼嵌入 像高 52.8cm 鎌倉時代(14世紀)

1. はじめに

日本において如意輪観音菩薩は、平安時代初めの密教伝来に伴い、本格的に信仰が始まったとされる。如意輪観音菩薩坐像特有の六臂の姿は、『観自在菩薩如意瑜伽法要』に説かれ、右第一手は頬に手を当てて有情を懸念し、第二手には如意宝珠を捧げ、第三手には念珠を持つ。左第一手は光明山に触れ、第二手には蓮華を執り、第三手には転宝を捧持する姿を特徴とする。坐法には経典に明確な規定はないものの、通常、六臂の如意輪観音は、右脚を立てて両脚裏をあわせた輪王坐であらわされる。

本研究では、こうした六臂の如意輪観音菩薩坐像にみられる複雑な図像に注目し、それを彫刻としてあらわす際の構造技法の工夫について、模刻制作という追体験を通して実証的に検証する。例えば、6本の腕をバランスよく作り上げるためには、他の尊格の仏像を制作する時とは異なる感覚で工夫を加えて造像されたことが予想される。本研究では、現存する六臂の如意輪観音菩薩坐像のうち日本の古典彫刻技法のなかでも仏師により様々な工夫がなされたとされる鎌倉時代の作例に注目し、特に奈良・元興寺所蔵の木造如意輪観音菩薩坐像を対象とした模刻制作を通して、六臂の木造如意輪観音菩薩坐像の制作工程の検証を試みる。

2. 研究対象について

研究対象とするのは奈良・元興寺が所蔵する木造の如意輪観音菩薩坐像である(図1)。像容から、本像の制作年代は14世紀と推定され、真言律宗の開基である叡尊(1201~90)による聖徳太子信仰に関わる作例として位置付けられてきた¹。本像は従来十分な調査が行われていないことや、これまでの修理記録がのこされていないことなどから、構造技法について未だ考えるべき課題が多く残されている。

3. 調査・研究手法

本研究では構造技法への理解を目的として模刻制作を行うこととした。模刻制作においては、まず熟覧調査及び写真資料の観察による木組み構造の把握を行ない、加えて写真測量による3Dデータ作成を通して、構造の理解を深めた(図2)。

4. 造像技法についての考察

(1) 首の技法(挿首)について

前述した通り、本像にも如意輪観音菩薩坐像特有の首を傾けて思惟する像容がみられる。今回の熟覧調査の結果、首と肩の接合部が緻密であることに加えて、体幹部材との木目が繋がらないことがわかり、総合的に見て、本像には挿首が採用されていると判断した。

そこで筆者はこの頸部の挿首構造に着目し、模刻制作を通して、首の制作技法である割首・彫出・挿首の中から仏師が挿首を選択した意図の解明を試みることにした。模刻による検証の結果、首の角度調

¹ 西木政統、『東京国立博物館所蔵の如意輪観音菩薩坐像と檀像表現』、『MUSEUM』第683号、2019

節が柔軟に行えるという利点が認められた。首の角度調節が可能であると、制作途中の段階で手と頭部の距離がアンバランスになった場合でも、首の角度を変更するだけで適切な位置へ修正ができる(図3)。一方で、首が始めから固定されていると、頬に手を添えている姿を表す際に、右第一手の腕の長さで調節しなければならず、他の腕とのバランスが崩れてしまう恐れがある。しかし、挿首ならば腕とのバランスを確認しながら首の角度調節が可能であり、これは六臂の如意輪観音菩薩坐像を造形する際に最も適切な技法ではないかと考える。以上のことから、本像を制作した仏師は如意輪観音菩薩坐像の像容に合わせて、挿首を選択した可能性がある。

(2) 腕の木取りについて

次に、腕の木取りに注目したい。今回の熟覧調査と写真資料の観察から、左腕の全てと右腕第二手は2つの木材から彫出されていることがわかった(図4)。この木取りの場合、木材の余りが多く出てしまい、あまり合理的とは言えない。そこで実際に同じ木取りで制作を行ったところ、鑿で水平方向へ叩き彫った際に縦方向に割れが生じてしまった(図5)。たしかに肘に矧ぎ目がないゆえに直感的に腕を彫ることができる良さはあると感じられるものの、彫刻作業においてはデメリットが目立つという結論を得た。本像では総じて木材の柃目を正面に向けていることが多いことを鑑みても、採用された腕の木取りは、仏師ないしは発願主の意向によるものと考えられる。

(3) 腕の制作工程について

本研究では模刻制作を通して腕の制作工程についても考察を行った。本像は体幹部材と腕が別々に彫刻されており、右手第二手と左手の全ては手首で矧ぎ合わせた2材で作られ、そのほかの腕は肘・手首で木材を矧ぎ合わせた合計3材で構成されている。

模刻にあたり、まず腕の部材のみ体幹部材に取り付け、後に一つずつ部材を接合するという計画を立てて、制作を進めた。ところが、この工程の場合、手首で寄せ合わせた2材で構成されている腕については腕の付け根で腕全体の角度が決まってしまうため、手先まで含めて調節を行わなければならないという問題が生じた。また、ひとつの腕の些細な角度の違いで像全体の印象が変わってしまうため、6本の腕のバランスを取るためには、指先まで合わせて調節することが必要であった。以上のことから、当時の制作仏師も、あらかじめ大まかな形を彫刻し、なおかつ手先まで接合した上で、体幹部材へ取り付けていたのではないかということを明らかにした。即興で腕の角度を決めながら像全体のバランスを取ることは困難を極めるため、当時の制作仏師はあらかじめ完成像を明確に想定し、計画性を持って制作をしていた可能性が考えられよう。

5. まとめ

本研究では、まず六臂の如意輪観音菩薩坐像における挿首という技法のメリットを改めて確認することができた。また、六臂の如意輪観音菩薩坐像において、腕は像全体の印象を決める重要な部材であり、それらのバランスを保つには首の位置が大切であることも実際に制作工程を追体験することで実感することができた。なにより、6本の腕を複雑に入り組ませながら全体をまとめ上げるには事前の計画性が重要であることは、模刻制作を経なければわからないことであった。

以上のことから、本研究での模刻制作を通して、本像を制作した仏師の技量を改めて強く実感する結果となった。如意輪観音菩薩坐像の制作においては、適切な技法を選択する能力や、物理的な課題を乗り越えひとつの立体へまとめ上げる彫刻的センスなど、伝承された彫刻技法とそれを実現させた仏師の持つ技術が凝縮されているのだということが、今回の模刻制作研究を通して改めて確認することができたといえるのではないかと考える。



図1 元興寺如意輪観音菩薩坐像 正面



図2 写真測量から作成した3Dデータ



図3 首の角度による右第一手との関係性

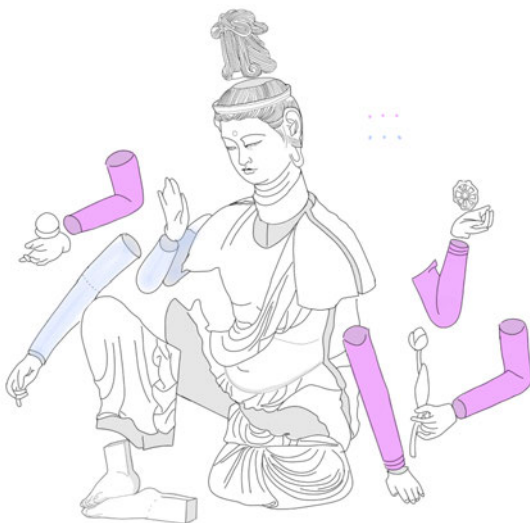


図4 予想解体図



図5 粗彫り時に木材が割れた様子